『首書源氏物語』桐壺巻頭注の翻刻と小考察（上）

――「或抄」の性格に関して――

安道百合子

はじめに

本稿は、『首書源氏物語　桐壺』（和泉書院・寛文十三年刊本・大阪女子大学付属図書館蔵本の影印複製）[1]の前半を翻刻したものである。あわせて、本書の性格にも関わる、引用注のうち「或抄」の性格についてのいささかの気付きを書きとめておきたい。

翻字にあたっては、割注、ルビなどは、できるだけ紙面の再現を試みたが、改行位置は／で区切ることとした。漢字はすべて新字体を用いた。また、抄出された先行注釈書の略号は【　】を付した。便宜上項目番号を付し、丁の変わり目に、」1オの形式で丁数と表・裏を示した[2]。なお、1丁表の冒頭本文の上段には「やん事なき」の項目から注記が始まるが、総論の末尾29丁裏にある桐壺巻の巻頭注のなかの「いつれの御時にか」から本文に関する注記が始まると見て、そこから連番を付すことにした。

一、『首書源氏物語　桐壺』前半の頭注の翻刻

1○いつれの御時にか【細流】発端は伊勢か集にいつれの御時にかありけん大みやすところと聞えける／御つほねにとかけるにもとつけりいつれの御時とさす事は肝要は醍醐の御時をさして云也高明公左／遷の事を以てすまの事をかく也惣而此物語のならひ人ひとりの事をさしつめてかくとはなけれと皆／古事来歴のなき事はかゝさる也おもては作物語にて荘子か寓言により又しるす所の虚誕／なき事は司馬遷か史記の筆法によれり好色の人をいましめんかために多くは好色婬風の／事をのする也盛者必衰の理出離解脱のえんも此物語の外には不可有云々猶細流抄委

2○女御【河海】日本紀雄略天皇七年求二稚媛一吉備上道女為二女御一是女御始也漢朝有二八十一女御一見周礼後漢書等

3○更衣【河】仁明天皇承和三年正五位上紀乙魚為二更衣一是更衣初也漢書章帝時始云々／便殿にさふらひて御衣なとをめしかへさせ奉るゆへに更衣と云也御休所と云もおなし事也／一条禅閤御説女御

は后よりも次の人也又更衣は女御よりは次の人也云々」29ウ
4○やん事なき【河】無止事也又無停事也【花鳥】きはめて／上らうの品をいふ位高き人の事はさしをかれぬ物なれはやむ／事なききはとはいへり云々【或抄】きはゝ涯字也又際字也／分際の心かなへり
5○時めき給ふ【河】絶妙（ユヒメク）日本紀時同時をえたる心也
6○はしめより【花】某更衣の中に三品種姓をわかてり我／はと思ひあかり給へるといふは大臣なとのむすめの女御たる人也／おなし程といふは桐壺の更衣とおなしほとなる大納言のむ／すめなとの種姓をいへりそれより下らうの更衣とは非参／議の三四位の品なるむすめなとをいふへし
7○めさましき物に【河】詩に冷眼とつくる此心也たとへはすさ／ましく見たる也そねみたるやうなるへし
8○おとしめそねみ【花】見おとさんとする心也【河】猜劣（ソネム）陥心歟
9○それより下らうの【或抄】上らうは大やうなれは物ねたみも／大かたなる也【細流】人は我身の品々なと心もちゐもある／物也いたらぬ下臈の人は嫉妬の心もふかき者と也
10○うらみをおふ　引あしかれとおもはぬ山の峯にたにおふなる物を／人のなけきは称名院殿引給へりおほくの人の恨をおひし／ゆへにやまひつきて宮つかへもをこたりて里住かちなりと也
11○あつしく【河】後漢書をひけり厄字也ひはつなる心也／【花】違例かちなるとあり／定家卿説あやうき心也云々」1オ
12○かんたちめうへ人【或抄】上達部は公卿三位已上也うへ人は／殿上人也前には女中のねたみをいふ也是は外様の人の妬也／我むすめなとの宮つかへするか時にあはんと思ひしに更衣一人に／時をとられたれはねたましく思也又説美人を愛して世／のみたれたる事なとを思也
13○あひなく【河】無愛也【万水】あちきなき也又はあひそ／なき心ともいへり
14○めをそはめ【河】史記郅都傳をひけり見レ都側（ツテ）レ目而／視号（ルソ）曰二蒼鷹（ト）一【万】万正躰に見ぬ心也
15○まはゆき【細】人のそねみてうちもむかはさる貌也
16○もろこしにも【細】花鳥にはもろこしにもといふより以上貴／妃の事のやうにしるさる不可然歟二段に可見也　これは／殷紂か姐（ダッ）己（キ）を愛し周幽王の褒（ホウ）似（ジ）を寵せしより世の／みたれたる事をひきていふ也楊貴妃のためしとかくはこの／巻は長恨哥にてかくゆへ也
17○かゝる事のをこり【河】起（ヲコリ）騎（ノリ）両（フタツ）義也
18○やう〳〵あめのした【河】無情（アンキナシ）　無端　無道／【或抄】初に女中のねたみをいひ次に上達部上人といひ又／天下にもと也世上にとやかくやといひくさにする也
19○いとはしたなき　引哥さもこそはよはの嵐の空からめあな／はしたなのまきの板戸や【万】きひしき心をいへり【河】無半事／【細】更衣によそより人の心むけ也」1ウ
20○たくひなきを【河】無比（ククヒナシ）　無類　交忝（マジラヒ）日本紀
21○父大納言　大納言の事河ニ委
【細】已下更衣の俗姓をいへり【孟】よみくせ口傳有
22○母北の方【万】男は南女は北面にすむへき事のいはれ也／陰陽をつかさとる故なるへしよしあるは由緒の心也俗姓／しかるへき人と也

23○おやうちくし【河】二親を具したる女御更衣たちを云也／細孤独の身なれとものかた〳〵おとらぬやうに母君のあつ／かひ給と也【或抄】更衣は母君の外しかるへき後見も／なきゆへに一かとある時はたよりなしと也

24○猶より所なく【河】　拠（ヨリトコロ）　無頼（ヨリトコロナシ）

25○さきの世にも【河】引君とわれいかなることをちきり／けんむかしの世こそしらまほしけれ／子ある契りは一世ならすと也

26○玉のおのこみこさへ【或抄】此さへおもしろきてにをはと／也更衣のためには姫宮にても幸なるに玉のことくなる／若宮をさへと也【花】人の徳をも玉にたとへ又かたち」**2オ**

をも玉にたとふる也【河】玉人といふ褒美の詞也／引あか玉のひかりはありと人はいへと君かよそひしたう／とくありけりあか玉とは子也子を玉にたとへたる也

27○右大臣【或抄】弘徽殿の女御の父也朱雀院の御／祖父也此女御をあし后といふ也

28○よせおもく【河】　寄重（ヨセヲモン）　縁（ヨセ）日本紀人のおも〳〵しく／思ひたてまつる也

29○まうけの君【河】　儲君（マウケノキミ）　儲皇（同）／【或抄】立坊まし〳〵て帝位につき給はん御子と也

30○此御匂ひ【細】毛詩　黍稷（ショショク）非レ馨（ス　ニ）明徳惟香（シ）といへる／ことくその人の威徳を匂ひといふ也

31○大かたのやんことなき【細】一のみこはもとよりの御／おほえはかりと也

32○をしなへてのうへ宮つかへ【細】女御更衣は別殿に伺／候してこそさふらふへきを此人は典侍（スケ）なとのやうに御前／さらすめしまとはせはかへりてかろ〳〵しき也寵愛の／はなはたしきあまり也。」**2ウ**

33○上つめかしけれと【細】上つめかしきとは上らうしきと也弄同／花鳥説如何

34○わりなくまつはさせ【河】河無別（ワリナシ）日本紀無破　纏（マトフ）

35○まうのほらせ給【河】参進（マウノボル）日本紀万引　参舁（マウノボル）八十氏人の／たむけすとかしこきさかにぬさたてまつる

36○おほとのこもり【花】長恨歌夜者専（ハ　ニシヲ）夜書同（ヨ　ハ　ス　ヲ）レ輩

37○やがてさふらはせ【或抄】更衣御とのゐよりすくに御／前に伺候し給也

38○をのつからかろきかたにも【或抄】典侍（スケ）なとのことく御まへさらす／めしつかへしゆへかろきやうに見えたるか此御子生れ給て／のちはみかとのおほしめす事もかろ〳〵しくなしと也／見えじをとしの字にこる説あり悪也細流の説にも／相違せり

39○坊にもようせすは【或抄】春宮坊也儲君の御方の事也／ようせすはとはあしくせは此源氏君の坊にゐ給はんと弘徽／殿女御のかたには御きつがひあると也／【河】ようせすは　不用　不能　不善」**3オ**

40○人よりさきに【或抄】あまたの女御更衣たちにさきたちて／入内ありし也さて朱雀の御連理枝もあるゆへにこきてんの女／御のいさめ給事をはそむきかたくむつかしく思給也／【河】諫（イサメ）

41○かしこき御かけをは【万】御門の御心さしのかたしけなきとの／更衣の心也【河】恐（カシコキ）をそるゝ心也賢にあらす可畏之神（カシコキカミ）日本紀／恐慎

同万引かけまくもかしこけれとも人丸奉高市親王短哥

42○おとしめきすをもとめ【河】好生ニ毛羽「悪生レ疵／【巴抄】後撰引なをき木にまかれる枝もある物をけを／ふききすをいふかわりなき漢書吹レ毛求レ疵

43○わか身はかよはく【孟】更衣の病者也

44○中〳〵なる【細】此物語中〳〵といふ詞はいつくも奇特也／凡哥の五文字にも中〳〵とをくは大事也末をいひお／ほせかたき故也御寵愛甚しからすはかやうにあるま／しきを是ゆへに中〳〵なる物思ひもあると也

45○御つほねはきりつほ也　此詞巻の名となれり／【弄花】桐壺は清涼殿の丑寅也其間殿々たゝりたり」3ウ

【河】淑景舎を桐壺といふ五舎の一也此桐壺は常の御殿／より艮のはてにあたりて弘徽殿麗景殿宣耀殿なとを／過てゆく馬道つゝきなれはあまたの御方〳〵をすきさせ給ふとはいへり

46○人の御心をつくし給も【或抄】更衣一人時めき給へはその外／の女御更衣たちの心をつくし給もことはり也と物語の地よりいふ也

47○うちはし【弄】渡殿のきりめんらうに板を渡してかよふ／をいふ也内階

48○あやしきわさを【花】村上の御時宣耀殿の女御と藤壺／の中宮と御物ねたみのありしにその御かた〳〵の人こゝかしこの道／に不浄をまきちらし侍る事をいへり河花委／【或抄】此の所説〳〵あれとも河海花鳥の説によるへし

49○まさなき【或抄】無正　正路になき也河内本さかなきとあり

50○えさらぬ【河】敢日本紀又吉【万水】えよきぬ事をいへり

51○心をあはせて【或抄】かたく心をひとつにして如此せらるゝ也

52○はしたなめ【孟】辱也はつかしむる心也

53○数しらすくるしき【或抄】かやうの事数もなく更衣の身にくるしき事ある也」4オ

54○こうらうてん【花】後涼殿は御殿の西にあたる殿なれは／常の御所に近き也曹司

55○うへつほね【河】たいの屋ならて上殿に局を給をいふ也／又中宮のまうのほらせ給おりは清涼殿の二間をうへの御局／にしつらふ也ひの御座のかたはらの二間を上の御局とは申也／【或抄】上局を給はる事は弘徽殿藤壺はかりにかきる也桐壺／に住給更衣なとにくたさるゝ事御寵愛のあまり也弘徽殿／藤壺には大臣なとのむすめの女御にて天子も尊敬ある／人ををかるゝ事也と云々

56○此みこみつに　皇子三歳にて着袴之例河委

57○くらつかさ【河】内蔵寮　おさめとの納殿在後涼殿後／【万水】くらつかさは御宝を置所也おさめ殿は諸国より／まいる物をおさむる所をいへり

58○それにつけても【或抄】第一の皇子におとらすし給は／いかゝと世上にそしるよし也

59○およすけ【万水】助及成人の心也【河】おとなひたる也

60○えそねみ【或抄】源氏のかたちのうつくしきを見ては／えにくみ給はぬ也心ある人はかやうの人も世にはあるかと」4ウ

ほめ給ふよし也

61○その年の夏【万水】是は袴きの年の夏也／こゝにて初て御息所といへり更衣は便宜の殿舎にて御衣／をめしかへらるゝ御やすみ所

に候するゆへ也御息所同事也／但此物語には更衣たる人御子をうみ奉て後御息所と／見えたり子細可有云々

62○年ころつねの【万水】まへにも違例の由見えたり／【或抄】更衣は常〳〵違例かちなれは御門の御目になれ給て／しはしは禁中にて養性をもし給へとの給也

63○五六日【弄】いつかむいかとよむへし又字のまゝよむ／人もあり

64○なく〳〵そうして【細】こゝにて退出のやうに見えたれ共／いまた御いとまを申也わりなくおもほしなからまかて／させ給つといふ所にてまことの退出也此筆法数多所有」5オ

65○あるましき【或抄】源氏君を更衣の里に渡し奉らん／事也遠慮してとゝめさせ給也／【万水】此心つかひ殊勝也

66○御らんしたに【或抄】更衣の病中始終を見とゝけ／給はぬ事をおほしめす御門の御心也

67○ことに出ても【河】万引ことに出ていはゝゆゝしみ山川／の瀧つ心をせきそかねつる古今引ことに出ていはぬ／はかりそみなせ川したにかよひてこひしき物を／【或抄】ことはに出して申たき躰なからえいひ出給は／すよは〳〵しき躰也／【弄】此詞殊に哀也云々余情を思ふへし」5ウ

68○まみなともいとたゆけにて【河】堕羸史記

69○いとゝなよくと【河】柔（ヤハラカニ）或云なよひか同心也／但なよひは麗字也

70○われかのけしき【河】引万夢にたに何かも見えす見ゆ／れとも我かもまとふこひのしけきに我か人かとうた／かふほとよはき心也【細】あるかなきかのけしき也正躰もなき躰也

71○てくるまのせんし【河】輦車清寧天皇三年奉（イテルニ）／億計弘計王（アケコケノ大キミヲ）以（テ）二王青盖車（ノアヲクルマヲ）迎（ヘ）入宮中（ニ）／仁明天皇女御藤澤子依レ病退出之時被レ聴二輦車（ヲ）／卒逝之後以二少納言（ヲ）被（レ）贈三位（ヲ）云々河海花鳥委／【和秘抄】云こしに輪をかけて手にてひく車をいふ／内裏の門の内なとをのる也

72○さりとも打すてゝは【或抄】御門の御詞也死するみち／なりとも我をすてゝはえゆかしと也

73○女もいといみしと【万水】此いみしの詞こゝにては過分／なるとの心也所によりて善悪につかふ詞也／【孟】更衣の心哀也。

74○かきりとて哥　更衣也【細】ありめのまゝなる哥也時に／のぞみて哀なる哥也いかまほしきはいきたきと也」6オ

75○いとかく思ふ給へましかは【細】花の義非歟かねてよ／ろつたのみし心の外になりぬる事を思ふことはなり／きのふけふとはおもはさりしをといふかことし御門の御返哥／のなきは御心を深くまとはし給事を見せたり／【花鳥】いかまほしきは命也けりと思ふやうならましかはの／こゝろ也云々

76○たゆけなれは【孟】たへかたき也

77○かくなからともかくも【万水】禁中にて更衣のともかくも／ならんを御らんしたきとの天子の御心也／【或抄】禁中にて人の死する事はなけれとも御寵愛のあ／まりにかやうにまて思召也

78○けふはしむへき【弄】更衣の里にて修法はしむへき故に／退出をゆるし給也是もふかくおほしめすによりて也

79○さるへき人〳〵【万水】加持の事をしかるへき人〳〵にお／ほせつけられしとの義也

80○まかてさせ給つ【或抄】こゝにて實に退出也
81○御つかひのゆきかふ【河】交加（ユキカウ）」6ウ
82○なをいふせさを【万水】心もとなき也
83○いとあへなくて【河】最無敢（イトアヘナク）　専（イト）
84○御子はかくても【河】源氏三歳時遭（フ）母喪（ニ）事文彦太子／　三歳時母左大臣時平女薨／【細】此段河誤也花説可レ然七歳已前の人服忌の事／醍醐の御代法をたてらるゝ事両度あらたまれり是は／はしめ七歳已前の人も服忌有へしとありし時の／分にてかける也【弄】猶有秘訣
85○何事かあらんとも【万水】源氏君のいときなき心をいへり／此さまことに哀也つきの詞にあやしと見奉り給へる／といへるも光君の心をいへり」7オ
86○あやしと見奉り【或抄】源氏のいとけなき御心にて不／審におもひ給をいふ也
87○よろしき事にたに【河】宜しとはたとへはさまてもなきこ／とをいへり暦によろしといふも中品の日也此物語にもよろ／しき日とあり但万葉に物はたゝあたらしきよし人はたゝ／ふりぬるのみそよろしかりける是は善義也可レ随レ所歟／此哥は尚書に器貴レ新人（ヘヒヲヘ）貴レ舊（フヲ）といへる心也／【弄】大かたの人の別たにかなしきならひなるをと也
88○れいのさほう【万水】葬送の事也
89○御をくりの【或抄】葬送に出る女房車也
90○をたきといふ処【細】今の六道是也むかしの葬所也／山城国愛宕郡也／河桓武天皇平安城に遷都の時／此地を諸人の葬所にさためたる見二延喜遷都記一（ニ）かしこに／珎皇寺といふ寺あり弘法大師の聖跡として今に東／寺の一の長者管領也
91○むなしき御からを【河】引古今空蟬はからを見つゝもなく／さめる深草の山けふりたにたて」7ウ
引哥もさる事なからたゝさしあたりての心哀也云々
92○はいになり給はんを【河】文武天皇四年三月道昭和尚／遷化七十二本朝火葬自二此時一始引拾遺もえはてゝ／はいになりなん時にこそ人を思ひのやむこにはせめ
93○ひたふるに【河】一切（ヒタフル）万永迅日本紀永同頓同甚振布万八雲抄云長〳〵と云心也又一向又ふてたる由也ひたすら同
94○さかしう【或抄】かねてはさかしけに母君のゝ給たれとゝ也
95○人〳〵もてわつらひ【或抄】かねてさやうにこそ思つれと葬／送に出たる女房とも母君をもてわつらふ也
96○三位のくらゐ【弄】みつの位とよむへきにや
97○その宣命【或抄】大外記なとより書出す也／葬送の場にてよみあくるよし也／三位を貶る事仁明天皇の女御藤澤子の例也前に註す
98○女御とたに【万水】此たにといふ詞にて后にもと御門のおほし／めしたる御心見えたり大納言のむすめ立后の例河に／委多に依て略之
99○今一きさみの【或抄】三位を貶給事也桐壺更衣は／存生の時は四位にてありしかと也されともたゝうち／まかせいへるなるへしと云々」8オ
100○是につきても【或抄】御門の御寵愛のあまりなると／更衣を死後にもにくむ也又心ある人は更衣のとかは／なし御門のなされやう

あしきゆへと也
101○心はせ【河】心操（コヽロハセ）　平（ナタラカ）日本紀　圷同論語
102○さまあしき御もてなし【細】御寵愛のすくれたるに／よりて人の
にくみをうけ給也
103○すけなう【河】無人望日本紀／【孟】はゝからぬ心也
104○うへの女房【或抄】うへ宮つかへの女官を云也
105○なくてそとは【河】引ある時はありのすさひににくかり／きなく
てそ人はこひしかりける
106○はかなく【河】無墓（ハカナシ）又無計或量無道日本記／いふかひなき心也
107○のちのわさ【万水】七日〳〵の事をいへり／【或抄】後のわさなど
にもとあるにてよろつこまやかに／孝養し給心見えたり」8ウ
108○御かた〳〵の【河】栄花物語云宮うせ給て後何事もおほしめさ／
れすゆゝしきまて見えさせ給此ほとは女御みやす所の御とのゐ／
たえたり【細】他人の御とのゐは絶てなしと也猶なき跡まて／人の
そねみあると也
109○なみたにひちて【河】引音になきてひちにしかとも春雨／にぬれ
にし袖ととはゝこたへん
110○露けき秋也【河】引人はいさことそともなきなかめにて／われは
露けき秋もしらるゝ
111○なき跡まて人のむね【或抄】御門の御なけき深き事を／きつかひ
してむねふたかると也是も更衣ゆへと也
112○一の宮を【孟】御門の御心に光君をおほしやるゝ也
113○したしき女房御めのと【万水】源氏にしたしき女房源氏の／御乳
母を里よりめしよせて御使につかはさるゝといへり／【或抄】天子
の御心やすくめしつかふ女房又は御乳母なと源氏／にもしたしき
ゆへあるをつかはさるゝなるへし
114○野分たちて【河】暴風（ノワキ）【花】たちては達也野分のやう／なる風也立
にはあらす【或抄】たちてはめきての心也」9オ
115○俄にはたさむき　将又膚両説あり【細】将字よろしき也／引新古
今　秋風のやゝはたさむくふくなへに荻の上葉の音ぞ／かなしき
是将也【万水】此詞のつゝき御愁傷の哀をそへ／たる時節なるへし
116○ゆけいの命婦　靫負也左右衛門を云也河花に委／【花】命婦は今
の世に内侍の外おり物を着せぬ中臈を／むかしは命婦と号せり侍
臣已下のむすめ也
117○夕つく夜【河】暮月夜万夕附夜同又日本紀
118○心ことなる物の音【或抄】更衣琴も上手にてありしと也／哥も人
にはまさりたると也更衣哥かきりとて別る／道のとよめる哥の外
物語には見えすされとも上手にて／ありしなるへし
119○やみのうつゝには【河】古今引うは玉のやみのうつゝは／さたか
なる夢にいくらもまさらさりけり／【細】夢にいくらもまさらさり
けりといひたるよりは此おも／かけははかなきと也引哥とりさま
奇特也
120○門引いるゝ【巴抄】悉皆車をもたせたる也」9ウ
121○やもめ住なれと【河】礼記云少而無レ父者謂ニ之孤一／老而無レ子者
謂ニ之独一老而無レ妻者謂ニ之鰥一老而／無レ夫者謂ニ之寡一此四者天民
之窮也／戸令曰五十以上而無レ夫為レ寡上下略
122○めやすきほとにて【或抄】更衣をつくろひたてゝみるめ／やすく
ありしと也

123○やみにくれて　後撰引人のおやの心はやみにあらねとも／子を思ふ道にまとひぬる哉
124○野分にいとゝ【弄】みかきつくりたりし所のほともなく／あれたる心ちする也
125○月かけはかりそ【河】引とふ人もなき宿なれとくる春は／八重むくらにもさはらさりけり／【細】春を月にとりかへて引用也
126○とみに【河】急変と云心也急の心也伊勢物語に云しは／すはかりにとみの事とて御文あり【或抄】母君の命婦を／見給てかなしみをもよほして先うちなき給さま也
127○よもきふの露分入【河】拾遺引いかてかはたつねき／つらんよもきふの人もかよはぬわかやとの道
128○はつかしう【細】母君の身にてはかやうのとふらひに／あつかる事ははつかしきと也」10オ
129○けにえたふましく【万水】たへかたくなき給と也／【河】一眉猶　巨耐　双眼　定　傷人遊仙窟
130○ないしのすけ【河】内侍　典侍　掌侍／【細】是よりさきに内侍介を御使につかはさるゝ事有へし／【或抄】前にしたしき女房御乳母なとをつかはしてとあり／此等の人なるへし
131○やゝためらひて【河】八雲抄云やゝは漸也較踉蹌／扶行白氏文集／【或抄】命婦しはらくなみたをおさへて勅言をいひ／わたす也
132○思ひしつまるにしも【巴抄】驚一定初拭レ涙杜子／かなしひの深きは思ひしつまるほとかなしきと也
133○さむへきかたなく【或抄】夢ならはさむへきをさむるかた／なきと也
134○忍ひてはまいり【万水】母君に入内あれかしとの給也」10ウ
135○とくまいり給へ【或抄】若宮を具してはやくまいり給へと也
136○かつは人も心よはく【或抄】みかとの泪にむせひ給を／あまり心よはきと人もみんとつゝみ給御けしきを命／婦か見奉りて心くるしさに勅諚をも承りはてす／してまいりたると也
137○めも見え侍らぬに【万水】思ひにくれたるよし也
138○かしこきおほせこと【万水】忝仰也／【孟】勅書を光にてとの儀也」11オ
139○いと忍ひかたきは【或抄】月日の過るにつけて愁傷／しのひかたしと也
140○いはけなき【河】稚イハケナシ幼イトケナシ
141○もろともに【万水】御門と更衣との事をの給へり
142○おほつかなさを【或抄】おほつかなさを思ひやり／つゝとかへりたる文躰也
143○今はなをむかしの【万水】若宮を更衣のかたみになすら／へて母君に見給へとの文言也
144○宮きのゝ哥　御門の御哥也【花】宮き野は宮禁に／たとふ露ふきむすふはなみたをいふ小萩かもとは／若宮の御事也
145○え見給ひはてす【或抄】母君のかなしひのあまりに／御文をも見はてす我かなけきをいひ給也
146○命なかさの【河】荘子曰壽者多レ辱
147○松のおもはん【河】六帖引いかにしてありとしられし高砂／の松のおもはん事もはつかし
148○百しきに【河】百官の座を敷ゆへに禁中を百敷／とはいふ也【万

水】ゆきかひとは行かふ也かひは交字也」11ウ

149○身つからはえなん【或抄】母君の禁中へまいる事はえ思ひ／たつましきと也

150○いかにおもほししるにか【或抄】源氏のおさなくおはし／ますゆへかなしき事もおほしめしわかすはやく／まいりたかり給と也

151○うち〳〵【万水】内〳〵也

152○ゆゝしき身に【河】引侘ぬれはつねはゆゝしき七夕も／うらやまれぬる物にそ有ける　引ゆゝしとていむ／とも今はかひもあらしうきをは風につけてやらなん／ゆゝしきは善悪に通する詞也多はいま〳〵しき／心歟忌字也【或抄】善は由々敷也悪は憂々敷也

153○見たてまつりて【細】源氏を見まいらせてありさま／そうせんする物をと也」12オ

154○くれまとふ【弄】子を思ふ道をいへり母君の詞也／後撰引人のおやの心はやみにあらねともこを思ふ／道にまとひぬる哉

155○わたくしにも【万水】命婦に御使ならて私に渡り給へと也

156○おもたゝしき【河】面立　面目の心歟／【万水】めんほくらしきやうの事也／【細】更衣在世の時はおもたゝしき事にて御消息有／しに只今思ひかけさる事の御使にかなしきと也

157○せうそこ【万水】御文の事也又案内をもいへり／【或抄】消は死也息は生也と注して死生をとふ心也／然而人にをとつるゝ事也

158○かへす〳〵【孟】清て可讀

159○むまれし時より【万水】更衣の心かたちをいへり／【或抄】在世の間始終の事をかたり給也

160○今はとなるまて【或抄】臨終の時まて也」12ウ

161○おもひくつをるなと【河】頽堕クッォル／【或抄】思ひくたひるゝやうの心也

162○はか〳〵しうしろみ【或抄】更衣はしかるへき親類／なともなき也

163○ましらひ【或抄】あまた交りて宮つかへするをまし／らふといふ也

164○人けなき【孟】人とも思はれぬと云心也つゝはなからと／いふ心也

165○人のそねみふかく【万水】人のそねみなとつもりてうせ／給ひぬれは横死のやうに母の心には思ひ給也

166○よこさまなるやうにて【河】薬師経九横死あり／横為毒薬厭祷咒咀所中害といへり

167○かへりてはつらくなん【細】寵愛のはなはたしきもかへり／てはつらきと也是も心のやみと也」13オ

168○是もわりなき心のやみ　人のおやの心はやみにの哥也／【或抄】御門のかたしけなき御心さしをつらく思は子を／おもふ道のやみにまとふゆへと也

169○うへもしかなん【孟】うへのおほせ事もたゝ今御物語あると／おなし事にておはしますとの義也

170○なかゝるましき【万水】更衣を御寵愛人めもおとろく／はかりにおほされしは更衣の命長かるましきはし／にやと天子も今はつらくおほしめされしよしかたる也

171○世にいさゝかも【弄】聖主の御心つかひ殊勝なり／但女の事にては乱れ給ひし御事もます／ならひ也／【万水】聖主の御心つか

ひ殊勝也さてこそ延喜には／比し奉りたれと也

172○さるましき人の【或抄】うらみらるましき人にうら／みられ給ひしも更衣ゆへと也」13ウ

173○かたくな【河】頑カタクナシ

174○さきの世ゆかしうなん【万水】前世の契りゆかしきとの／心なり【或抄】前世の宿業いかやうなれは如此なるそと也

175○御しほたれかちに【河】神事式に泣をは塩たるゝと云り／【万水】泣事をいへり

176○なく〳〵夜いたう【細】まへに夕月夜のおかしきほとに／出したてさせ給といふにかけて見るへし夜の更ゆきたる／景気余情たくひなし／【或抄】夜も更ぬといへるゆへいたう更ぬれはとかけり

177○もよほしかほ【弄】哀をもよほす也

178○立はなれにくき【或抄】哀に物かなしき住ゐを見／すてかたき心也

179○草のもと也【河】古哥の詞未勘蓬かもとなと同し風情歟

180○すゝむしの哥　命婦也【万水】すゝ虫のことく声のかきり／をつくしてなくとの心也長き夜あかすとはこゝをさり／かたき心をいへりふるとは鈴虫のえんの詞なるへし」14オ

181○えものりやらす【細】前に門引入るよりとかきてこゝに／えものりやらすとかけり悉皆車の事を車とはいは／て余情にてかけり

182○いとゝしく哥　母君也【万水】此あさちふはさらてたに虫／の音しけきを命婦のたつね給ゆへにいとゝ涙をそふると／の心也虫のねしけきといふも母君のなくねもしけき心を／もたせたり【花】昇殿の人を男女ともに雲上人と云へし

183○かことものきこえつへく【河】かことは所によりて其心かはる／へし是はかこつ義也　誓かねてちかひ置心也少事いさゝか なる心也誥うらむる心也今の心也【或抄】引哥河に三首ありいつれもこゝの心に不叶是はかこつ也誥の字叶歟

184○御をくり物【万水】命婦への送物也昔は大家よりの使／には必送物を給る常の義也

185○御さうそくひとくたり【河】一領也

186○御くしあけのてうと　金釵鈿合のときかみあけの／具也河海万水ニ委【弄】御くしみとよむへし

187○わかき人〳〵【花】是は若宮の御かいしやくの人〳〵／をいふ也

188○さう〳〵しく【河】寂寞和名又閑さひしき事也」14ウ

189○そゝのかし【或抄】母君に禁中へはやくまいり給へと／女房たちのもよほし申也

190○いとうしろめたう【河】顕護ウシロメタシ 和名／引古今女郎花うしろめたくも見ゆる哉あれたる／宿にひとりたてれは

191○すか〳〵【河】河速スカク敷いそく心也／【細】はや〳〵との心速也

192○またおほとのこもらせ【細】主上いまた御寝ヒエシンならさる／と也尤哀なるへし命婦のかへりまいるを待給故也／【弄】此時の御有さま尤哀に見奉るへし

193○つほせんさい【細】此巻の一名ともいへり／【河】清涼殿東庭并同西庭朝餉并臺盤所前／被レ栽二前栽一延喜元年左右衛門裁二草架一／【万水】命婦のかへるを御心には下待給へともうへは草／花を御らんするやうにてとの心也落着は人目を／いさゝかはゝかり給御心なるへし」15オ

194〇長恨歌の御ゑ【万水】是は玄宗の楊貴妃にをくれ給ひし／も今桐壺の御門の更衣にをくれ給御心にひとしければ明暮／長恨哥のゑを御らんする也亭子院と申すは寛平法皇の御／事也延喜の父御門也かゝせ給てとは御絵の事にはあらす／紅葉々の御哥を御てつからかゝせ給てさて伊勢貫之にも哥／よませられたるとの義也ともいへり河海花鳥の説御哥をかゝせ給によれり亭子院七条以南油小路以東一町／伊勢集に云長恨哥の御ゑの御屏風亭子院かゝせ給／て所〳〵の名をよませ給けるに御門の御手にて紅葉々の／色にわかれすふる物はもの思ふ秋の泪也けり伊勢か哥／玉すたれあくるもしらすねし物を夢にも見しと思ひ／かけきや貫之か哥はいまた不勘と也

195〇もろこしの哥【或抄】詩をいふ也

196〇たゝそのすちをそ【万水】人のつまにをくれたるすちを／もとめて哥も詩も御らんするなるへし

197〇まくらこと【巴抄】詩哥を朝夕のことくさと云心也もて／あそひなとの心也

198〇いともかしこきは【万水】かたしけなき也／【或抄】恐カシコシ可畏同をそれかましきなとの心也」15ウ

199〇あらき風哥　母君也【花】あらき風ふせきしとは母更衣／にをくれ給へる事をたとへ侍りしつ心なきは閑なる心／なく心くるしきよし也【或抄】こはきは子の字の心を／もたせたり若宮の事也

200〇みたりかはしきを【細】両義あり第二三句御門の御／うへをいふに似たり仍可憚と云心也又義此ほとのみ／たり心ちにかきさまなともみたりかはしき也草子の／地評していふ也【弄】たゝかきさまの心にて可然歟

201〇いとかうしも見えしと【万水】御門の御心也更衣の事を／これほとまてなけき給とよそめに見え給はしとおほし／めせともえ忍ひ給はぬと也

202〇御らんしはしめし【或抄】御なけきのあまりに更衣の宮／つかへにまいりはしめられし時よりの事を思ひつゝけ給也

203〇ときの間も【或抄】更衣の在世には片時も見給はねは心／もとなく思召たるにかくても月日はをくらるゝ物よと思召也

204〇かくても月日は【細】かくてもへぬる世にこそ有けれの心也／古今身をうしと思にきえぬ物なれはかくてもへぬる世／にこそありけれ

205〇こ大納言の【細】大納言の心さしを母君のきこえしに／よりてほせらるゝ也」16オ

206〇かひあるさまにと【万水】天子の御心には更衣をは后に／もと思ひ給ひしかともそのかひなきと也

207〇いふかひなしやと【孟】いひてもかひなしと也

208〇いと哀におほしやる【万水】御門の御心に母君の里の事を／おもひやり給也

209〇さるへきつゐても【巴抄】若宮もし位なとにもと也

210〇なき人のすみか【河】長恨歌傳取二金釵鈿合一各折二／其半一授二使者一曰為レ我謝二太上皇一謹献二是二物一尋二／其舊好一也【巴抄】臨邛道士幻術をもて蓬莱山に／至て楊貴妃にあひて金釵鈿合此二の物を半を折て／給よし長恨哥に有是は母のかたよりにて更衣に不逢也／かひなしと也河花委【万水】まへに御くしあけの事を／かける首

尾おもしろきもの也

211○たつねゆく哥　御門御哥也【河】まほろしは方士也幻術の／士の名也玉のありかは魂の在所也

212○ゑにかける【万水】此ころ御らんする長恨哥のゑの事を」16ウいへりいみしき絵師とは可然とほめたる詞かきりありけれは／とはいかにかくといへともえかきつくされぬ物そといふ心也からめい／たるよそひとは楊貴妃のさうそきたるかたちさこそとおほし／めしやりたる心也うるはしとは實字也かよひたりしとは似たる／との心をいへり

213○大ゑきの【河】長恨歌大液芙蓉未央柳芙蓉如面柳／如眉對此如何不涙垂此已下諸本不同にて異本多し／河海花鳥委

214○なつかしう【河】仮借貞観政要

215○らうたけ【河】労良同亮同　日本紀　ほけ〳〵としたる心也

216○花とりの【河】引後撰花鳥の色をも香をもいたつらに／物うかる身はすくすす也けり【細】貴妃にはたとへもありし也／此更衣はたとへん物なき也【巴抄】貴妃を芙蓉柳にたとへ／しはうるはしくこそ有けめ今更衣の事を思には花鳥にも／よそふへきかたなしと也芙蓉柳にたとへしはなをさりなるへき也／からめいたるはさもこそと一重又更衣の事をかきる也

217○はねをならへ【河】在天願作比翼鳥在地願為連理枝長恨釈／天暦御製いきての世しにての後の後の世もはねをならふる／鳥と成なん御返し女御宣耀殿かく契りことのはたにもかはら／すは我もかはせる枝となりなん」17オ

218○こきてんには【万水】朱雀院御母女御也後に悪后と申也／源氏君をそねみ給人也されはこゝにも御門の御なけき／の折ふしつれなく御あそひをし給なるへし／【細】かくまての御なけきにて有へきとも思給はぬ也／【巴抄】礼記曰其里有喪則不相

219○うへの御つほね【或抄】直盧也うへ局の事也

220○物しと【万水】此物しといふ字かたちなき字なから／又かたちあり一部の内に所〳〵にありおもしろき詞也／こゝの心は御あそひしかるへからさるとの心也

221○かたはらいたし【或抄】おかしき事にもせうしなる事／にもいふ詞也所により心かはる也こゝは笑止なる心歟

222○いとをしたち【河】最押立　才　日本紀　廉々／【万水】こきてんのをしたちて我はと思ひあかり給心を云り／更衣の逝去をさらになけくへき事にもあらすと思召／心なり

223○月もいりぬ【細】此詞殊勝の由古来所称也まへに／夕月夜とかき月は入かたの空とかき月もいりぬとかけ／る月落長安半夜の句にもおとらすやと云々／五天到日應頭白月落長安半夜鐘三体詩

224○雲のうへも哥　御門の御哥也【万水】禁中は御汨にくれ／て月を御らんするに母君の宮の月は何とかすむらん／とおほしめしやる御心也」17ウ

225○ともし火をかゝけ【万水】夕殿蛍飛思悄然弧燈挑盡未／能眠長恨歌

226○右近のつかさの【河】亥一刻左近衛夜行官人初／奏時終子四刻巳一刻右近衛宿申事至卯一刻内竪／亥一刻奏宿簡近衛夜行として左右近衛半夜をかき／りて宮中をめくりて警衛をいたす也

227○よるのおとゝ【河】清涼殿にあり四方妻戸あり南は大妻戸／一間

也東枕に御寝と也

228○あくるもしらてと　伊勢か玉すたれ明もしらての歌也註前／【河】春宵苦レ短日高起従レ此君主不二早朝一長恨歌／【細】長恨歌には貴妃か寵によりて也こゝは更衣の事を御なけき／にをこたらせ給也猶の字殊勝也

229○あさかれいの　朝餉の間清涼殿の二間也河海万水／等の諸抄季早朝にまいる御膳也今は世の常の／神供なとのことく也

230○大床子の御もの　膳字也諸抄委是を畫の御膳／と云也清涼殿の御帳の前にたつると也大床子は机の掌／なる物也【細】朝かれいは女房のはいせん大床子のは／殿上人のはいせん也いつれをも御らんしいれさると也」18オ

231○はいせんにさふらふ【河】蔵人頭已下四位侍臣役送／四位五位六位随候有陪膳番

232○すへてちかうさふらふ【或抄】御はいせん申人〳〵なら／す御前ちかき人〳〵は男女ともになけく也

233○さるへき契り【万水】前世の御契り也

234○そこら【万水】おほき心也こゝらと同心也又そこもと／の人の事をもいふ歟

235○此御事に【細】御寵愛のはなはたしきによりて此更衣／の事にふれては少は道理をまけたる事にもありしとは／後涼殿の更衣をよそにうつし給なとの類なるへし

236○今はたかく【万水】世上の事をは万事打捨給と也

237○たい〳〵しき【河】退々水源同奥入此字不審断々敷はあい／うゑをの五音通する也事ヲサ態同神楽本の／哥に何わさを我はしつゝか天照やひかめの神をしはし／とゝめん

238○人の御門の【河】私語サヽメコト耳言サヽメク万　楊貴妃うせて後／玄宗位をさり給ひし事也。是もさやうにやおはし」18ウ

まさんすらんとなけきける也

二、或抄について

『首書源氏物語』は寛永十七(1640)年の跋文を有し、寛文十三(1673)年版と宝永三(1706)年版本とが伝わっている。跋文と刊記のどちらを成立と考えるかで、本書の意義も大きく変わってくるが、成立に関しては、初版が明暦年間から寛文初年(1655～65)頃に遡る可能性があること、物語本文が万治三(1660)年刊『源氏物語』(絵入)を底本と推定されること、などが既に指摘されている。[3] 刊記の寛文十三年より以前に作られたとすれば、まさに『湖月抄』にさきがけて、物語の本文にはじめて頭注をつけたテキストだということになる。上下二分割した紙面の下段に物語本文を、上段のほぼ本文に対応する位置に『河海抄』以下の諸注をのせている形式は、「読解に便利な」[4]書物としての体裁を備えている。

さて、その注には、河海抄、花鳥余情、源氏和秘抄、弄花抄、細流抄、孟津抄、紹巴抄、万水一露、という先行注が、注釈書名の頭の一字などを冠して引用されているほかに、「或抄」という注が見える。「或抄」について、片桐洋一氏は「物語の展開の中

にその表現を見ていく態度」を認められ、「考証的に過ぎた古い時代の注釈書とは違って、物語を楽しんで鑑賞し、それをわかりやすく説明している態度がはっきりと示されている」と指摘された。ただし、この注が「いかなる注釈書であるか、誰によって、いつの時代に作られたものであるか、まったくわからない」[5]ともされている。その後、榎本正純氏は、「なお明らかにしがたいが、岷江入楚と関わりがあるらしく思われる」とし、影印叢書の解説を書かれた葵巻については、一覧を示されたうえで、その関わりの深さを実証しておられる。さらに、「首書源氏物語が細流抄や或抄といった三条西家の、あるいは三条西家と関わりのあると思われる注を重視していることと、首書本葵巻の本文が三条西家とゆかりの深い本文にやや近いということの符号は、単なる偶然だとはいいきれない興深い事柄に属しているともいえようか」と論じられた[6]。また、一方、清水婦久子氏は、「物語の文脈をわかり易く説明する傍注と「或抄」の註釈態度は、徒然草や大和物語などを段落に区切って大意を示すことに力を注いだ（松永）貞徳の註釈態度に通ずる」と論じられた[7]。

ここでは、「或抄」の注本文と一致する注が、本居宣長が『源氏物語玉の小櫛』（以下『玉の小櫛』と略す）で引用する「或抄」と一致する場合があることを指摘しておきたい。

『玉の小櫛』一の巻には「註釈」と題して、河海抄、花鳥余情、弄花抄、細流、明星抄、孟津抄、岷江入楚、萬水一露、湖月抄をかかげ、さらに源注拾遺や紫家七論、熊澤了介の外傳などに言及している。『湖月抄』については、大方は評価しつつも、誤りがある場合があることを指摘し、さらに、諸注引用の姿勢として、もっとも古い注釈書を指摘すべきなのに、後の注釈書から引用している場合があることを「心得べき」とする。そのうえで、『玉の小櫛』で引用する注のなかに「或抄」が存する。ただし、『玉の小櫛』のなかでは、「或抄」はごく一部で、管見によれば25例を数える。うち桐壺に5例、以下、帚木3、空蟬1、夕顔4、蓬生1、橋姫2、総角1、宿木3、東屋1、浮舟2、蜻蛉2例である。

以下に、『玉の小櫛』が桐壺巻で或抄に言及している箇所を引用する[8]。桐壺に関しては、頭註番号18・142・176・229・321（次号掲載）に該当し、142はその注を否定される文脈で引用されるが、18・176・321はその注を肯定する文脈で引かれる。ともかく229をのぞく4例は、『首書源氏』が引用する「或抄」と一致している。

あぢきなう　天の下の人もあぢきなき御しわざとするよし也、或抄云、はじめに女中のねたみをいひ、次にかんだちへうへ人といひ、こゝに天の下にもといへり、

もろともにはぐゝまぬおぼつかなさを　これは諸共にはぐゝまぬがおぼつかなきをと有けんを、がもじを落し、きをさに誤れるなるべし、本のまゝにては穏ならず、或抄に、おぼつかなさを思ひやり

つゝと返りたる文也といへるは、わろし、さてはつゝといふ詞よしなし、〈以下略〉

夜いたうふけぬれば　或抄に、前に夜もふけぬといへる故に、こゝには、いたうふけぬればとかけりといへる、まことに心をつくべきふし也、すべて此物語、かく何となき詞にも、心をいれたる所多きぞかし、

あさがれひ　或抄云、陪膳の女房、御さばをとり云々といへり、此説は皆、いと後世の趣にて、こゝの趣にはかなはず、こゝのやうは、大床子の御ものは外ざま、朝がれひは御内々也、大床子の御ものなどは、いとはるかにおぼしめしたれば、といへるにてしるべし、大床子のを、常の御膳也といへるも、まぎらはし、

あやしくよそへ聞えつべき　或抄に、藤壺の、桐壺更衣によく似たまへれば、源氏の御母とも、よそへいふべきこゝちし給ふと也、といへるよろし、湖月説は、いみしきひがこと也。

これらの注はかなりかみくだいた表現で、しかも、これ以前の他の注にはみられない指摘を含んだ場合である。文脈に応じた読み方を示したものでもある。ちなみにこの注の該当箇所の岷江入楚を見ても、類似の指摘は見当たらない。このことは何を意味しているのだろうか。一部にしかすぎないが、岷江入楚に近いとする見通しを一端排除して「或抄」の性格を見ることもできるのではないかと思う。（続く）

注

（1）『首書源氏物語　総論桐壺』片桐洋一氏編（和泉書院　1980）

（2）『首書源氏物語』の翻刻としては、先に、中島和歌子氏「『首書源氏物語　須磨』の頭注の翻刻と小考察（上）―山陵参拝と『白氏文集』の諷諭詩―」「『首書源氏物語　須磨』の頭注の翻刻と小考察（下）―忘れ草、枕を欹つ、琴の声と五節、這ひ渡る―」（『札幌国語研究』第五、六号　2000・2001）に須磨巻頭注の翻刻がある。方針は中島氏の方法に習った。

（3）清水婦久子氏「版本『首書源氏物語』の成立と出版（上）」「版本『首書源氏物語』の成立と出版（中）―異文注記より―」「版本『首書源氏物語』の成立と出版（下）―成立と編者―」『青須我波良』55号～57号（帝塚山短期大学日本文学会　1999～2002）

（4）注（1）解説による。

（5）注（1）解説による。

（6）『首書源氏物語葵』榎本正純氏編（和泉書院　1983）解説による。

（7）注（2）「版本『首書源氏物語』の成立と出版（下）」による。

（8）『玉の小櫛』本文は、『本居宣長全集』第四巻（筑摩書房　1969）より引用した。